

NEWSLETTER

編集・発行 日本催眠医学心理学会

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1
パレスサイドビル 9 階
（株）毎日学術フォーラム内 TEL. 03-6267-4550

No. 57 2010. 8. 31

日本催眠医学心理学会 ☆☆ 日本臨床催眠学会 合同学術大会（JSH 第 56 回大会、JSCH 第 12 回大会） ご案内

日本催眠医学心理学会第 56 回
日本臨床催眠学会 第 12 回
合同学術大会会長 松木 繁

拝啓 立秋の候、皆様、健やかにお過ごしのことと思います。

既に皆様には第 2 号通信にてお知らせしました通り、本年の学術大会は JSH 第 56 回大会と JSCH 第 12 回大会を鹿児島大学にて合同で開催致します。現在、準備委員一同、10 月 9 日（土）～11 日（月・祝）の開催に向け一丸となって準備を進めております。どうか、よろしくお願い致します。

今年の合同学術大会は、両学会の常任理事・理事の先生方をはじめ会員の皆様のご協力を得て、大会長である私の長年の希望でもありました合同開催をさせて頂けることになり感謝致しております。参加資格の差異、発表者の所属と資格認定のあり方、研修内容の策定などさまざまの懸案を抱えながらの大会開催ではありますが、それを越えて開催することが今後の催眠研究に大きく貢献するであろうとの私の思いに基づいて進めておりますので、今後ともどうかよろしくご協力の程お願い致します。

成瀬悟策先生、高石 昇先生による対談では、半世紀以上にわたる両先生のご研究を振り返って頂き、催眠療法の治癒機制に関するディスカッションや今後の催眠研究および臨床催眠の方向性についてご提言頂けるようお願いしたいと考えています。不勉強かつ若輩者の私の司会ですのでまとめることは不可能かと思いますが、参加される会員の皆様に向けてさらなる研究促進のためのエールを送って頂けることは間違いないと確信しております。

さらに、大会に先立つ 9 日（土）には、催眠技法研修会上級コースとして Michael D. Yapko 先生の特別ワークショップを計画しております。ワークショップの基本テーマを大会テーマの「催眠の新たな可能性」に重ねながら「Hypnosis and Treating Depression」としてうつ病治療に対する新たな可能性を開く機会にしたいと考えています。1 日研修というタイトなスケジュールの中でのワークショップですが、デモンストレーションやビデオセッションも行なってくれる予定です。また、「Depression is Contagious」というタイトルで行なって頂く特別講演では、うつ病の社会的な側面に焦点を合わせた治療の方法論や具体的技法について話して頂く予定です。

大会スケジュールでは、他に「催眠の新たな可能性」、「ペインコントロールと末期ガン患者に対する催眠適用」の 2 題のシンポジウムにて催眠研究の新たな流れや治療方法の開発などが話し合われます。研究発表も事例研究や実験・基礎研究発表等、10 数題のエントリーがあり活発な討議が行なわれるものと思います。

（次頁へつづく）

先の案内でも触れましたように、日本本土最南端の鹿児島での開催ですので大会参加者が集まるのか心配しておりますが、現在、ワークショップも定員近くまで申し込みを頂いております。ただし、海外からの招聘を行なった場合の経費負担が大きいので赤字にならぬようにワークショップの参加定員を少し増やすべく会場の対応をすることに致しました。まだまだ参加可能ですので是非とも多くの会員の先生方のご参加をお待ちしております。

今、桜島は非常にアクティブで毎日のように噴煙を上げておりますが、我々準備委員一同も桜島に負けぬくらいのエネルギーで頑張りたいと考えています。懇親会では若い人達のエネルギーなおはら音頭も披露させて頂けるかと思えます。

焼酎と温泉を満喫して頂きながら催眠の新たな可能性について語り合う機会になればと思います。多数の皆様の御参加を心からお待ち申し上げます。

敬具

研修会参加印象記

2010年・催眠技法研修会 —初級：入門・基礎コース—見聞録

吉田 稔 (吉田クリニック)

キツネさんとウサギさんが「おやすみ！」なんて挨拶を交わすような、そんなとんでもない山奥じゃないでしょうね？石川県石川郡野々市町扇が丘と聞いて、ふとそんなことを思った。ところが実際には金沢市のほんの隣り、ほど良くゴチャついた街に金沢工業大学はあった。後で聞いた話では日本一面倒見の良い大学だとか。そしてこの地で研修会が開かれるのは今回が初めてとのこと。さあ、今日もしっかりかかってやるぞ！なんだかうれしい。ちょっとお祭り気分。

午前中はまず笠井仁先生の「催眠の基礎理論と倫理」の講義から始まった。いろんなスライドを拝見する。「催眠の定義」、「催眠の理論」…あらためて学ぶこと多々あり。そして「催眠はなぜ嫌われるか？」。催眠は科学的理性を侮辱するものらしい。翻って我々会員は、なぜそんな催眠がこんなにも大好きなのだろう？研修会には皆熱心に参加。年に一度の大会には万難を排して押しかけ、ちょっとアヤシイ異人の話とともにトランスに入る。そして催眠系の他の学会や何とかクラブに行っても、出逢うのはいつも当学会で顔見知りのメンバー。さらに最近目の体操で虎馬退治をする人たちの集まりを覗いてみたら、やっぱりよく知った顔ぶればかり。その人達がお互いに先生になったり生徒になったりして和気あいあいとやっている。威張っている人などいない。本当に変な人達…などとボーッと考

えていたら、もう実習タイム。実習では笠井先生の班と田中新正先生の班に別れる。後者になる。実はかく言う私、催眠はまだまだ下手だけど、被験者としてなら腕が揚がりっぱなし。今回は倒れ方も上手いと田中先生にお褒めの言葉を頂戴する。臆病さんなんかには負けないぞ！

午後はまた後倒法。田中先生のお気に入りらしい。そして身体を揺さぶって導入。電車で居眠りをするのと同じ原理？次に先生御自ら事例を提示。催眠は導入の後、それをどんな風に治療に結びつけるのだろうか？興味津々で拝聴する。ところが患者さんは、何と催眠療法を受けるまでもなくたちどころに治ってしまった。しかもその理由はさっぱりわからないと、涼しい顔で先生はおっしゃる。是レ正ニ、古ノ弓スラ忘レシ弓ノ名人紀昌ガ神業ナリ。嗚呼、日暮レテ道遠シ。我唯ダ天ヲ仰ギテ嘆息スルノミ。

最後に斎藤稔正先生に催眠の奥義を伝授される。曰ク「催眠ノ秘訣ハ、催眠ニ絶対ニカカル人ノミニ催眠ヲカケルコトナリ」ト。なるほど！ありがたい。深く心に刻んで研修を終える。

満ち足りた気持ちで研修修了証明書を頂いて帰ろうとすると、長谷川先生に呼び止められた。ニューズレターへの原稿執筆の件、よろしくとのこと。エッ！何のこと？すると催眠の資料と一緒に依頼書を入れておきましたよとのお答え。大慌てで探す。確かにある。しかし朝書類をチェックした時には、こんなもの絶対になかった。Zwangの私が見落とすはずがない。となると負の幻覚だったのか、それともキツネさんの仕業なのか？丁重に辞退する…が、何と首は勝手に縦に振られているではないか？！

しまった！後催眠暗示だったか！！自宅に戻って悟った時には、すでに後の祭り。

催眠技法研修会上級に参加して

大住 明美

(水谷クリニック・大住心理臨床オフィス)

日本催眠医学心理学会主催の催眠技法研修会が2010年7月4日に金沢工業大学で行われました。金沢工業大学は日本三大名園で有名な兼六園がある石川県金沢の郊外にあります。大学には建物の中心に上下のエスカレーターがドーンとあり、とっても立派な学校に驚かされました。帰りはしっかりと美しい新緑(ちよつと遅めではありますが)の兼六園を友人と散策し、お抹茶などいただき、九谷焼の陶磁器を買ったりして、アフター研修会を思う存分に味わい楽しみました。

私は上級に参加させていただきましたが、参加の皆さんは臨床経験の豊富なベテラン先生ばかりで、少し肩身の狭い思いをしました。講師の先生は鹿児島大学の松木繁先生で、私は先生が鹿児島に赴任される前までは京都の研究所でスタッフとして勉強させていただいていました。始めはレジュメなしで行う予定が急遽変更になり、講義は午後レジュメが出来てからということになりました。実習は午前中に1セッション、午後から講義のあと4セッションと最後に松木先生のデモンストレーションがありました。

実習は相互学習の形態をとり、ペアを組んでデモをしてその後で皆が互いに意見を言って振り返りをするやり方でした。少人数でその都度、個別に指導していただきました。研修テーマは効果的な臨床催眠ということで、伝統的催眠とエリクソン催眠のコツとその違いについて、また臨床適応のポイントについてでした。実習に入る前に時間と技法、テーマの枠組みの設定がありました。

午後一番に始まった講義は、まずは伝統的催眠とエリクソン催眠の違いについてでした。伝統的催眠は状態的特性を利用することにあり、どんな事例にどのように利用すれば効果があるのかが良く理解できました。またエリクソン催眠はクライアントと向き合ったその瞬間から、そして催眠誘導中にもその会話や印象の中に、関係的特性・共感的特性・相互作用を如何に上手くユーティライズしたら効果が上がるかを考えながら臨床をするかというものでした。私などつい見逃してしまいそうな些細なクライアントの一語一句一挙動をさえも、松木先生は捉えてユーティライズされるスキルはすごいと感動しました。また催眠状態そのものにコミュニケーションを促進させる要因が内包されていて、コミュニケーションや関係性の変化を感じ取る

能力が必要であり、それらを安全に扱う能力も必要であるということでした。

催眠の臨床適応のポイントとしては観察とペーシングですが、そのさりげない動作一つをも見逃さない鋭い観察の眼が臨床家には必要だということ、クライアントの微妙な身体的バランスにまでも、セラピストは気づかなければならないなど臨床適応のエッセンスを講義していただき目からうろこの感動をいただきました。

実習のメンバーは随分ユニークでしかも経験豊富な臨床家の先生方が多くて、どなたが講師の先生かと思われるほどでした。あるセッションでは表情筋・咀嚼筋の緩め方等々を教えていただき、個人的に歯科医師の集まりで講演を控えている私にとってはとても素敵なおみやげをいただきました。私は人数が多いと意見が言えなくなる性格なので、5人という少人数だったことが、言いたいことが意見としてではなく会話の一つとして言いやすかったのもとても良かったと思います。メンバーはよく存じている人たちが多くてとても打ち解けて和気あいあいとしたものでした。私が今までに受けた研修会の中では今回が一番楽しかったし、またとっても有意義であったと思います。

正直言って、この原稿を頼まれた時は憂鬱になりましたが、書き終わってみると研修の振り返りが出来て自分の勉強になり、とても良かったと思っています。

ありがとうございました。

催眠技法研修会初級実証研究コースに参加して

安達 友紀

(大阪大学大学院臨床心理学研究分野)

2010年7月4日に金沢工業大学にて開催された催眠技法研修会に参加してきた。そして、学会ニュースレター執筆という大任を承った。「僕の書いたニュースレターで今後の実証研究コースの受講者数が減ってしまったらどうしよう」などと少し考えてしまう。「いい若い者が」と諸先生方からお叱りを受けそうなほどの後ろ向き具合である。このような思考が後ろ向きな筆者による拙い文ではあるが、研修会当日の雰囲気や会員の皆様にくわくかでも感じて頂ければこれ幸いといったところである。

先にも触れたが、筆者が受講したのは初級実証研究コースで、午前が斎藤藤正先生、午後が笠井仁先生の両講師によるものであった。午前の斎藤先生の時間は講義中心で、

メスメルの動物磁気の話から始まって状態説と非状態説の論争、催眠実験の手続き、尺度を用いた催眠誘導と多様なトピックが取り上げられた。その中に先生のスタンフォード大学留学時代のエピソード(被催眠者にRelaxの暗示を提示する際のRとLの発音の話など)が盛り込まれており、難しい話も楽しみながら学習できる雰囲気があった。斎藤先生が言っておられた中で特に興味深かったのは「全ての催眠は自己催眠である」ということである。この立場で考えれば、暗示の提示の仕方以上に被催眠者の動機づけに多くの注意を払うことが重要になってくる。催眠者が被催眠者に一方的に何かをするという考えは、ある種傲慢であり、被催眠者の様子を観察して内的状態を推測しつつ、被催眠者の背中を押すように暗示を提示するという考えの方が催眠現象を説明するのにより適切なのだろうかとは筆者は連想した。

午後の笠井先生の時間では前半は実習を、後半は実証研究の動向についての講義が行われた。催眠実験を行う上でも催眠現象としてどのようなことが起こるのかに親しんでおくのは大切、という先生の一声のもと各受講者がペアになって実習を行う。筆者は普段催眠誘導を行う機会が少なく、研修会で実際に誘導を行うのは貴重な機会であった。後倒法に苦手意識があり、大丈夫なのかと思いつつペアの方と練習してみたが、勝手に後ろに倒れていく感じがしたと言ってもらえた。筆者もまた自然と後ろに倒れていく感じを感じられた。午前の部で聞いたことはこういう事なのだろうかと思ったり耳から入った情報と自分の感覚が繋がっていく体験を楽しんだ。後半の講義の時間で印象に残ったのは催眠の臨床研究のトピックであった。近年、特に認知行動療法の分野では、様々な疾患や問題に介入研究を行い、その有効性を示している。いわゆるエビデンスに基づいた心理療法というものである。催眠もそういったエビデンスを示していくことは重要であるが、他の心理療法以上に、治療手続きのマニュアル化の困難などの問題があることを笠井先生は述べておられた。

臨床研究に限らず、実証研究コースに出ている参加者同士で「自分は今こういう催眠の実証研究をしている」という話には中々ならない。研究が臨床場面でストレートに役立つことは少ないかもしれない。だが「これこれこういう事が確かめられているんですよとクライアントに伝えられることは大事」と昨年の大会のシンポジウムで飯森洋史大会準備委員長が仰られていたことに実証研究の必要性・有用性が詰まっていると筆者は思っている。今回初級実証研究コースに出席して、細々とでもデザインを組んで

催眠の実証研究を行っていかないとなああと改めて感じたのであった。

委員会報告

委員会活動計画 (企画・教育委員会、研究委員会)

委員長

松本 繁(鹿児島大学)

企画・教育委員会では、活動計画に沿って本年度も研修会を中心に活動を行なっています。本年度第1回研修会は、会員からの地方開催も行って欲しいという要望に応える形で7月4日(日)に金沢工業大学にて開催されました。北陸の地での初めての開催でしたが、長谷川明弘先生をはじめ金沢工業大学のスタッフの方々のご尽力により参加者も多く盛況裡に終えることができました。また、久しぶりに上級コースを設け、シュミレーション型の研修ではなく臨床実践が可能になるような実践的な催眠研修を行うことができ参加者の評価も高く好評でした。

第2回研修会は鹿児島での合同学術大会にあわせて行います。技法研修会上級コースとしてMichael Yapko先生のワークショップを1日研修として組んでいます。うつ病への催眠適用を中心にデモンストレーションやビデオセッションも含め中身の濃い研修になるようです。また、初級コースも入門コースを中心に行なう予定です。Yapko先生のワークショップは現在、100名の定員にほぼ達しつつありますが、会場の工夫を行うことでさらに多くの参加者を集めたいと考えていますので申し込みがまだの方は早々にお申し込み下さい。

地区研修会も東京・福岡・鹿児島を中心に今年度も開催が予定されていますので、会員の方々の研修機会を十分に活かされてさらなる研鑽をつまれることを願っています。

国際交流委員会からの活動報告

委員長

長谷川 明弘(金沢工業大学)

国際交流委員会は、海外の学術団体や研修会に関する情報を含めた国際的な動向について本会の会員との橋渡し

を担当しております。

今回の1番のお知らせは、この秋の10月9日から11日まで鹿児島で開催される本学会と日本臨床催眠学会との合同学術大会の大会長である松本繁先生が、Michael D. Yapko 先生を招聘されたことです。ご存知の方も多いかと思いますが Yapko 先生は、エリクソン派の臨床催眠の第一人者で2006年にも来日されております。Yapko 先生は特にうつ病性の精神疾患に対して催眠や認知行動療法を併用して実践ならびに研究されています。さらにはブリーフセラピーや家族療法、夫婦療法もご専門ですので、本学会

の会員に限らず関連する学術団体に属する専門家にとっても貴重な研修機会となることが期待されます。鹿児島での合同学術大会へお問い合わせの上ふるってご参加頂けたらと思います。

海外での各種大会ご参加される会員がいらっしゃったらご一報をお待ちしております。他にも情報や問い合わせなどございましたら いつでも

hasegw_a@neptune.kanazawa-it.ac.jp

まで連絡をお待ちしております。

あなたも「認定催眠士」をとりませんか？ —資格認定委員会からのお知らせ—

資格認定委員会委員長 井上忠典

昨年の総会において確認し、学会誌において公告しましたように、学会認定資格の名称が、従来の「催眠技能士」が新たに「認定催眠士」に、「指導催眠技能士」が「指導催眠士」にそれぞれ変更になりました。

いずれの資格についても従来の「催眠技能士」の諸規定にしたがって資格認定を行っています。申請の受付は年1回となっていて、9月10日から12月10日と定められています。その資格関係規定集や申請書等につきましては、いずれは学会ホームページからダウンロードできるようにしたいと考えていますが、現在のところ下記の資格認定委員会事務局にお問い合わせいただき、関連資料を取り寄せていただくこととなります。資格取得の大まかな目安は表1及び表2のとおりです。

催眠現象の面白さや心理臨床における催眠の有効性について広く認識してもらうための一助として、また催眠を用いる研究者や臨床家としてのアイデンティティを確かにして研鑽を積んでいくための目安として、学会認定の資格取得を目指す会員が増えることを願っています。

<資格認定委員会事務局> 窪田文子 E-Mail kubotano@iwakimu.ac.jp

表1. 学会認定資格の資格認定の基準

		認定催眠士	指導催眠士
1	基礎資格	正会員3年以上 医学・心理学等の大学卒業ないし大学院修了	会員 認定催眠士資格
2	研究実績	10p以上 (本学会学術大会参加2p以上・8p上限)	20p以上(認定催眠士資格認定後) (本学会学術大会参加2p以上・8p上限)
3	研修実績	(※1時間を1pに換算)	80p以上(認定催眠士資格認定後)
①	理論分野	10p(6p以上本学会主催研修会)	10p
②	実技分野	20p(12p以上本学会主催研修会 ・1回以上中級・上級に参加)	50p(15p以上本学会研修会の指導者研修 ・20p以上資格者研修会)
4	推薦者	指導催眠士2名の推薦	指導催眠士3名の推薦
※	有効期限	5年ごとの更新	10年(認定催眠士資格を有すること)
	暫定措置		・当面の間、審査は書類審査及び面接 ・学会研修会において指導的役割の実績及び指導催眠技能士2名の推薦

表2. 「2 研究実績」のポイントの内訳

①	学会誌論文(筆頭・単独)	8 p
	〃 (その他)	3 p
②	学術書	5 p
③	準学術書	3 p
④	本学会研究発表(筆頭・単独)	5 p
	〃 (シンポジスト・講師)	5 p
⑤	他学会研究発表(筆頭・単独)	2 p
⑥	研究レポート	2 p
⑦	本学会学術大会参加	2 p (2 p 以上必須・8 p 上限)

エッセイ

現代催眠とサイコセラピーについて ふと思うこと

佐瀬 竜一(大阪国際大学人間科学部)

いきなり私事で恐縮であるが、平成18年4月より、大学教員として心理学関連の講義や学生指導などを行う仕事に携わっている。それまでは大学院生として自律訓練法を中心とした研究や臨床に携わってきた。このように現在は学生相談などには関与しているものの、催眠からは一見あまり縁のない大学教育の世界で毎日を過ごしている。

しかし、ここ2~3年、臨床心理学やサイコセラピーの知識や知見が大学教育の世界に必要なものなのではないかと思う機会が増えた。その理由の1つとして、大学への門戸の広がりによる学生の多様化を挙げることができる。具体的には大学生としての学力を備えていない学生、身体障害・精神障害を抱えた学生、留学生など多様な学生が大学に入学するようになってきている。このような学生の多様化に伴い、学生への必要な支援も勉学だけでなく生活支援、適応支援、健康支援、進路支援と多様な支援が大学には求められることになった(このことが望ましいかどうかはまた別問題としてあるが…)。臨床心理学は様々な心理・行動の問題に多様な方法で解決をサポートするための心理学である。したがって、臨床心理学はこのような多様化する支援のニーズに応えるために適した1つの分野といえるだろう。さらに関連するもう1つの課題として、現

代の大学生におけるメンタルヘルスの問題の増加を挙げることができる。近年、大学生のストレスフルな状況や精神発達の未熟さが指摘されている。また、現代大学生の自尊心の低さについても報告されている。自分自身も日々学生と接していて、現代の大学生の自信のなさ、自分への手応えのなさには危機感を抱いている。もちろん過度の誇大な自尊心を抱くことは問題であるが、青年が様々な困難を乗り越えていくためには一定の自尊心は必要といえる。このような現代大学生のメンタルヘルスの問題により素早く適切に対処することが大学教育の向上に必要なことになってきている。これらのことから、現代の大学教育において臨床心理学の理論やサイコセラピーの方法論を積極的にかつ正しく慎重に導入することは大学教育において必要なことであり、大学教育の可能性を広げるものと思われる。

また、最近大学を含めた「学校の先生」の発言の意味の大きさを痛感することが多い。学生と話をしていると、実によく過去の「学校の先生」の発言を覚えているなど思う。また、自分自身の働きかけも含めて「学校の先生」の一言一言が学生自身の生き方や価値観に及ぼす影響も大きいことを日々再確認させられる。一方、当たり前のことであるが、サイコセラピーにおいてはセラピストとクライアントの関係性が重要となる。特に現代催眠ではセラピストの言葉や発する一言が、他の方法以上に大きな意味を持つ。大学教員になる前から研究や実践の場で「言葉」の持つ意味の大事さを分かっていたつもりであったが、やはりその重みを当時は全く分かっていなかったのだと今になって思う。「学校の先生」が日々困っていること、特に生徒や学生との接し方に対する解決方法のヒントが、催眠の中

にあることを少しでも多くの人に正しく知ってもらいたいと願う。また、院生の時から催眠医学心理学会に参加していたことが、現在大学教員の仕事の中で予期せぬ形で役立っていることを振り返り、「人生、何がどこでどう役立つか、わからないものだなー」なんてことを改めて思うのである。

催眠療法と「静かなシャーマン」

大宮司 信(北翔大学人間福祉学部)

精神科の薬物治療の進歩はめざましい。その発展ぶりを見てみると「1粒の錠剤が心を変える」といったキャッチフレーズもまんざらうそではないかもしれないという気持ちになる。ただそうはいっても、日々の患者さんとの言葉のやりとりがなくなるわけではない。どんな風にお話すべきか、おつきあいを続けるべきか、本を開き、人に尋ね、名人と言われる人の面接に陪席して学び続ける必要性を筆者は放棄しない。

定年退職後、現在の職場にまた教員として勤務するようになった。筆者の着任と時を同じくして、東京から村瀬嘉代子先生が同じ大学に着任された(日本臨床心理士会会長とうかがっている)。しばらくして同先生指導のセミナーが開かれることになり、筆者も参加させていただいている。

ご著作には以前から親しんで感銘を受けていたが、臨床の実際、症例の実際を通して教えていただくと、「精神療法とはこうしたものであったか」という感慨を今更ながら深くし、毎回目が開かれる思いで学ばせていただいている。

こんな貧弱な筆者が書くのもどうかと思うが、先の薬物療法や行動療法と違い、よくいわれるように精神療法には、治療者自身が治療の流れに一つの布石として巻き込まれざるを得ない面があると思う。臨床催眠の領域も(筆者の勝手な思い込みだが)、自律訓練法のように途中までは治療者が付き合うが、主として患者自身が体得していかなければならないような領域が存在する一方、他者催眠は、あくまで治療者自身がとことん付き合う治療法と考える。

数年前、ご指名いただき、本学会で「トランスの治療的意義」というシンポジウムに参加させていただいた。専門とする宗教と精神医学の関連に関する研究に踏まえて、シャーマンの成立過程(成巫過程)という視点から筆者は切

り口を見出そうとした。

シャーマンの意識変容が、来談者へ「神のお告げ」を示すだけでなく、自身がその成巫過程で持っている心の問題(場合によっては「巫病」という精神のやまい)の解決に重要なことはこれまでもよく知られている。このことから患者がシャーマン同様に変性意識をもつことが、この治療法の機序に関連していると考えたのである。

この時にも若干発言させていただいたのだが、患者の変性意識だけでなく、治療者が何がしかの変性意識をもつことも催眠の治療機序の中には存在するのではないかという考え方があつた。もちろん患者の意識変容は重要だが、そればかりでなく治療者自身の意識のあり方にも治療の成否が関わるとする見方である。

ロジャースが最晩年に述べた「プレゼンス」(ただ病者とともにいること。このときの治療者の意識状態にロジャースは変性意識状態という言葉を与えている)や神田橋が言っている「治療者の脱魂状態」などもこの間の消息を語っている。学会の理事長をなさった齋藤稔正先生もご講演の中で、この治療者の変性意識について格調高くふれておられる。

さて、修験道や山岳宗教には、神がかりするシャーマンと、それを神の声として聞く来談者との間を取り持つ審神者(さしわ)がいる。審神者は一方では来談者の問題を聞くという点で「しらふ」でなければならないが、シャーマンの神がかりの意識状態にも理解を示さなければならず、場合によっては一定程度の同化も必要だ。

このような審神者を、ある宗教学者は「静かなシャーマン」と呼ぶ。神がかりした激しい動きをするシャーマンに比してこうした名称が与えられたのであろう。健全意識と変性意識の両者を使い分ける存在として筆者の目には映る。

トランスや変性意識に治療的な意味があり、それが患者だけでなく治療者にも起こることが必要なのだとするなら、治療者のそれはシャーマンよりは審神者のほうに類似するのではないかと筆者は考えている。神がかつたシャーマンのように全く我を忘れるようにならない点も類似している。

同時に、臨床催眠が精神療法と結びつくのはこうしたあたりにもひとつのポイントがあるのではないかと思う。そうしたら、両者の技法と治療機序はどのようになっているのか、そんなことをあれこれ思い回らすのである。

研修会情報

1. 学会主催研修会

- 1) 平成 22 年度第 1 回催眠技法研修会 (終了しました)
期日：2010 年 7 月 4 日 (日)
会場：金沢工業大学

- 2) 平成 22 年度第 2 回催眠技法研修会 (第 56 回大会)
期日：2010 年 10 月 9 日 (土)
会場：鹿児島大学 郡元キャンパス

同時に催される、Michael D. Yapko 先生の特別ワークショップ『うつ病への催眠適用』と技法研修会の両方に参加することはできません。ご注意ください。詳しくは学会ホームページ、56 回大会案内 (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsh/>) をご覧ください。

2. 地区研修会

- 1) 東日本催眠療法研究会第 4 回研修会 (終了しました)
期日：平成 22 年 1 月 9 日 (土)～10 日 (日)
会場：東京医科歯科大学

- 2) 鹿児島臨床催眠研究会第 3 回研修会 (終了しました)
期日：2010 年 2 月 28 日 (日)
会場：鹿児島大学 郡元キャンパス

- 3) 福岡催眠療法研究会第 16 回研修会 (終了しました)
期日：平成 22 年 3 月 20 日 (金)～22 日 (日)
会場：九州大学発達臨床センター

※地区研修会の開催情報をお寄せください。

編集後記

57 号も皆様のご協力を得まして、ようやく発刊までたどり着くことができました。

今回は催眠について自由に語っていただくことを企図して編集しました。特にエッセイでは「現代催眠とサイコセラピー」というテーマで執筆をお願いし、佐瀬先生には現場に生きる催眠について、大宮司先生には治療者の変性意識について、それぞれ示唆に富むご寄稿をいただきました。執筆者それぞれの体験と思いが、会員の皆様の催眠とのかかわりに刺激となっていれば幸いです。ご執筆いただいた先生方に改めて感謝申し上げます。

私事ではありますが、広報委員を仰せ付かって 3 年、これまで主に学会ホームページの管理をおこなってきました。会員の皆様の情報をつないでいくというのも広報の役目でもあります。会員の皆様に有用な情報を正確かつ迅速にお伝えすることのみではなく、皆様からご意見や情報をお寄せいただき、さらに広く発信していくという双方向の交流ができるよう WEB を活用して・・・と意気込んでおりました。が、目論んでいたホームページのフルモデルチェンジは結局ささやかなマイナーチェンジにとどまってしまいました。任期の残りはわずかですが、何かもう一工夫をと考えております。何かアイデアをお持ちの方、お知恵をお貸しください。ご協力お願いいたします。

さて、引き続き広報委員会ではこのニューズレターやホームページで会員をつなぎ、会の活動の活性化に努めたいと思います。どうぞ会員の皆様もご意見ご感想、情報をお寄せくださいますようお願いいたします。

ニューズレターは広報委員が編集担当をリレーしてきました。本年度が任期の最終年度でありまして次号の発刊は次期委員の皆様のリレーいたします。引き続きよろしくお願いいたします。

(編集：渡邊浩司)